令和四年十一月

漢詩鑑賞

**宿石邑山中**

**にす**

**浮雲不共此山齊　　ものとしからず**

**山靄蒼蒼望轉迷　　として　　たう**

**曉月暫飛千樹裏　　くぶ　の**

**秋河隔在數峰西　　はててり　の**

【通釈】起句　浮き雲も此の山の峰々ほどの高さはなく、（峰の中腹に漂い）

　　　　承句　は青々と深く山を包み、辺りはぼんやりとして見定めが

　　　　　　　つかない。

　　　　転句　見あげると明け方の月が生い茂る木々の中を一瞬飛ぶよう

　　　　に動き、

　　　　結句　天の川が峰々を隔てた西の空に懸かっている。

【語釈】　石邑…今の中国河北省西陘県の古名。太行山脈の険阻な山々が

　　　　　　　　連なる地方。

　　　　　共…ここでは與と同じ比較の助詞に用う。

　　　　　齊…等しい。同じ。

　　　　　蒼蒼…深い青さをたたえた形容。

　　　　　轉…うたた。いよいよ。ますます。

　　　　　曉月…明け方の月。

　　　　　秋河…秋の夜の天の川。

【押韻】　平声、斉韻。齊、迷、西、

【解説】　韓翃は中唐の詩人。南陽(河南省)の人。字は君平。天宝十三年(七五四)の進士。官途に就いた後、一時辞任して十年間浪人生活を送った。

後、徳宗に認められ中書舎人に到った。詩人としては銭起らとともに暦十才子の一人に数えられる。

この詩は恐らくは作者が石邑の山中の仏寺か道観(道教の寺)に宿泊して作ったものであろう。秋の山中払暁の清冽な観望を詠じた佳作で、転結の対句の冴えが美事です。

以上